

『狭衣物語』 作中歌の背景（二）

後藤，康文
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/15486>

出版情報：文献探究. 23, pp.48-55, 1989-03-20. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



『狭衣物語』作中歌の背景 (一一)

後藤 康文

本稿は、前稿注(一)にひきつづき、『狭衣物語』卷二の作中歌についてその背景にある先行歌を探ろうとするものである。調査の方針は前回同様であり、特に言及すべき事柄のない歌や、諸注により十分な指摘がなされている作に関しては、あえて取りあげないこととする。

* * *

尋ぬべき草の原さへ霜枯れて

たれに問はまし道芝の露

※4:たれと(内)

古四一

深四三

内四四

素性も知らぬままに忽然と姿を消した飛鳥井女君。その行方は杳としてわからない。卷二巻頭部に置かれたこの狭衣の独詠は、全書も指摘するように、『源氏物語』花宴巻の朧月夜の詠、

うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思

ふ

を本歌とする。右の『源氏物語』歌以外には特別注意すべき先行歌は見当たらないが、第四句「たれに問はまし」について、参考までにひとつだけその用例を挙げておきたい。

虫の音

但馬君

浅茅生の露吹きむすぶ木枯らしにみだれてもなく虫の声かな

橘正通

秋風に露を涙となく虫の思ふ心をたれに問はまし

(「天禄三年八月規子内親王前裁歌合」 九二〇)

「たれに問はまし」という表現自体は、『信明集』・『和泉式部集』・『源氏物語』等にもあり、別段珍しいものではないが、ここで「規子内親王前裁歌合」時に詠まれた右橘正通の歌を例示したのは、「虫の音」の題のもとでこれに番えられた但馬君の「浅茅生の」歌が、『狭衣物語』卷一の狭衣の独詠、

夕暮れの露吹きむすぶ木枯らしや身にしむ秋の恋のつまなる

に踏まえられていたからである(前稿参照)。なお、正通の詠作は

『順集』(一七)、『詞花集』(三三)にも収められている。

死にかへり待つに命ぞたえぬべき

なかなかなにに頼めそめけん

※5:たみ(深が)

古四二

深四四

内四五

女二宮の美貌を垣間見た狭衣は、やおらその寝所へと忍び入り彼女を捉える。「こはたぞ」と動転する宮に対し、先年からの降嫁話に託して狭衣の詠んだこの作について、目下のところ特定の本歌は見出せない。ただ、下の句の「なかなかなにに」けんには、

思ひ寝の夢といひてもやみなましなかなかにありと知りけん
(『後撰集』八七)

いく世しもあらし桜を行く春のなかなかにに残し置きけん
(『道命阿闍梨集』三三・『続後拾遺集』六)
といった先蹤がある。

くやしくもあけてけるかな槿の戸を
やすらひにこそあるべかりけれ
古四四
深四六
内四七
※…あへかりけれ(言ほか)・すへかりけれ(言ほか)

女二宮との一夜の契りをただちに悔悟する狭衣。この詠作の根底には、大系や全書がいうように、『古今六帖』三三(達)の、

君や来ん我れや行かんのやすらひに槿の板戸をささで寝にけり
があるが、ほかに、やはり同歌に依拠した和泉式部の歌(『和泉式部集』六五・『後拾遺集』九〇)、

やすらひに槿の戸をこそささざらめいかであけつる冬の夜ならん
も注意される。また、この歌の初二句の表現「くやしくも」けるかな」には、

くやしくも見せてけるかな浦島のこめて置きたる箱の懸子を
くやしくも見そめけるかなべて世のあはれとばかり聞かま
しものを
(『和泉式部統集』五五)
(四条中宮・『詞花集』四七)
くやしくもかさしけるかな名のみして人頼めなる草葉ばかり
を
(『源氏物語』葵卷・四)

などの類型が見出される。

うたた寝をなかなか夢と思はばや
さめてあはする人もありやと
古四五
深四七・内四八

これは、狭衣の女二宮へ宛てた後朝の歌であるが、『信明集』一元の、

なかなかにおぼつかなさの夢ならばあはする人もありもしなまし
や、『実方集』三六・三七の贈答、
人知れぬ中はうつつぞなからまし夢さめてのちわびしかりけり

夢ならばあはする人もありなましなになかなかのうつつなるらん
あたりは、『狭衣物語』作者の念頭に浮かんでいた可能性のある先行歌として指摘しておいてよいだろう。

人知れずおさふる袖もしぼるまで
時雨とともに降る涙かな
古五一
深五三
内五四
※…ま念(内ほか)

病床につく皇太皇宮と女二宮を見舞った狭衣は、折からの時雨に恋の苦衷をひとりこつのであった。私見によれば、この歌は次の盛少将の詠作を踏まえていると思われる。
かぎりそと思ふにつきぬ涙かなおさふる袖も朽ちぬばかりに

(『師輔集』八・『後拾遺集』八六)

なお、「おさふる袖」という歌語を用いた先行歌には、ほかに、

しがらみとおさふる袖を頼めどもあまるは夜半の涙なりけり

(伊勢・『続後拾遺集』六六)

つれなくしておさふる袖のくれなるにまばゆきまになりにけるかな

(『増基法師集』三六)

などがあり、また、「時雨とともに」↓「降る」のパターンは、

神無月時雨とともに神奈備の森の木は葉は降りこそぞ降れ

(『後撰集』四五・『和漢朗詠集』三五)

もみち葉はをしき錦と見しかども時雨とともにふり出てぞこし

(『後撰集』四四・『古今六帖』三五)

等の歌にすでに見えている。

心からいつも時雨のもる山に

濡るるは人のさがとこそ見れ

※かこまみれ(内ほか)・まもまみれ(寛か)・かこまみれ(深か)

古五二

深五四

内五五

狭衣の「人知れず」歌を受けた中納言典侍の詠歌。この歌の上の句には、『古今集』二六(『和漢朗詠集』三五)の貴之の作、

白露も時雨もいたくもる山は下葉残らず色づきにけり

が影響を与えているか。そのほか、『後撰集』五三の、

たちかへり濡れては干ぬるしほなればいくたの浦のさがとこそ見れ

そ見れ

や、『大斎院前御集』八〇(陸)の、

神垣もしめのうちはへ時雨るればよそふるころのさがとこそ見れ

見れ

『為頼集』六の、

神無月いつも時雨はかなしきをこごひの森もいかが見るらんを参考歌として掲げておきたい。

雪居までおひのぼらなん種まきし

人も尋ねぬ峰の若松

古五三

深五五・内五六

娘女二宮が出産した狭衣生き写しの若君を見て、密通の相手の冷酷さを恨みつつ孫の行く末を祈る皇太皇宮。この独詠はおそらく、『源氏物語』柏木巻で不義の子薫の五十日の祝の日、光源氏が今は尼となった女三宮に詠んだ、

たが世にか種はまきしと人間はばいかが岩根の松はこたへんという歌を意識した作であろう。そして、右の光源氏詠はさらに、『古今集』九七(『古今六帖』四二)の、

梓弓磯辺の小松たが世にかよろう世かねて種をまきけん

を本歌としているのである。なお、結句「峰の若松」の先蹤には、『新撰和歌』五の、

春ごとにかずへこしまに日とともにおいそしにける峰の若松がある。

我ればかり思ひしもせじ冬の夜に

つがはぬ鴛鴦のうき寝なりとも

古五四

深五六

内五七

※…おほおほし松

師走の月の夜、女二宮を思ふあまりその里郎を訪れた狭衣は、池

に浮かぶ鴛鴦に自己を引き比べて詠歌する。その第四句の歌語「つがはぬ鴛鴦」は、平安中期頃から見えはじめ、『狭衣物語』に先立つ用例としては、たとえば次のこときがある。

冬の夜の霜うちはらひなくことはつがはぬ鴛鴦のわざにぞあ
りける (『小大君集』三)

思ひやれつららひまなきはらの池につがはぬ鴛鴦の夜のうき
寝を (藤原惟規・『統詞花集』六三)

冬の池のつがはぬ鴛鴦はさ夜中に飛び立ちぬべき声聞こゆな
り (『和泉式部集』七)

さらに、『康賢王母集』六・六九の贈答歌、
冬の夜につがはぬ鴛鴦のひとり寝にあやなく袖の濡れにける
かな

冬の夜の池のみぎはにうき寝せし鴛鴦の毛衣さもやさえけん
も注意すべき歌として指摘しておきたい(註)。

また、初二句の措辞及び一首全体の発想という観点からは、『拾
遺集』九齒の人麻呂の詠、

あちをの狩る矢の先に立つ鹿もいと我ればかりものは思は
じ。

が参考となる。この歌の結句は『狭衣物語』松井本の本文に等しい。

片敷きにいく夜な夜なをあかすらん
寝さめの床の枕浮くまで
古五五
深五七・内五八

女二宮の寝所に侵入し、悲しみの涙に濡れた彼女の衣類や枕を探
り当てた狭衣は、自責の念に堪えず、宮の「とどめ置き給へる御衣
をひきかづきて、よよと泣かれ給ふ」のであった(全書・三五―三七)

頁)。この歌の第四句に用いられた「寝さめの床」は、これを題と
して詠まれた和泉式部の作(『和泉式部集』六)、
語らはん人を枕と思はばや寝さめの床にあれと頼まん
をはじめ、『安法法師集』四の、

秋の夜の夜半の嵐のなかりせば寝さめの床に起きみざらまし
や、『小馬命婦集』五の、

いかでかは夜半の白露おきつらん寝さめの床もただならなく
に

などの詠作に見えている歌語であり、『更級日記』にも、
夢さめて寝さめの床の浮くばかり恋ひきとつげよ西へ行く月
という歌がある(註)。

なお、全書は、この狭衣の独詠が『物語白番歌合』において『源
氏物語』朝顔巻の光源氏の歌「とけて寝ぬ寝さめさびしき冬の夜に
むすぼはれつる夢のみちかき」と番えられている(三十六番)こと
に触れて、その事実は「狭衣のこの一段が、源氏物語、権巻の影響
下に成つた事を端的に物語つてゐると思はれる」とする(補注一七・
四五頁)。

いつまでか消えずもあらんあは雪の
煙は富士の山と見ゆとも
古五七
深五九・内六〇

庭の雪山を見ての源氏の宮の詠歌。今のところその背景として重
視すべき歌はないが、参考までに次の二首を掲出する。

けさ降りて日影に残るあは雪のいつまで消えぬ身とか頼まん
(『高遠集』六)

煙立つ富士の高嶺に降る雪は思ひのほかに消えずぞありける

もえわたる我が身を富士の山よただ

雪つもれども煙立ちつつ

※4…ゆきにもきす(深六)

古五八

深六〇

内六一

先の源氏の宮の歌に絡めた狭衣の心中詠である。これについてはまず、大式三位の作、

夜ごとただつくる思ひにもえわたる我が身を春の山辺ならまし

(『大式三位集』七)

を紹介したい。右の歌は、「さまざまの題を人びと詠みしに」という詞書を持つ歌群中のもの(題は「野火」)で、詠歌年時は不明であるが、『狭衣物語』に先立つものであるとすれば、狭衣詠への直接の影響関係を想定してもおかしくない作ではなからうか。

ほかには、『後撰集』の平定文と紀乳母の贈答(心三・六六)、

我れのみやもえて消えなんよととも思ひもならぬ富士の嶺のごと

富士の嶺のもえわたるともいかがせん消ちこそ知らね水ならぬ身は

や、『古今六帖』の二首(五二・五三)、

富士の嶺のならぬ思ひにもえはもえ神だに消たぬむなし煙をば
はては身の富士の山ともなりぬるかもゆるなげきの煙絶えね

を参考歌として挙げておく。

頼めつついく世へぬらん竹の葉に
降る白雪の消えかへりつつ

古五九
深六一・内六一

春宮より源氏の宮に贈られた歌。ここに見える「いく世へぬらん」↓「ふる」の表現型には、たとえば『後撰集』八七の、

君見すていく世へぬらん年月のふるとともに落つる涙か

や、『拾遺集』二四の、

君問はでいく世へぬらん色かへぬ竹のふるねのおひかはるま

で
などの先例があり、「竹(笹)の葉」と「雪」とのコンビネーションは、『古今六帖』五二・七三の二首、

笹の葉に降りつむ雪の末をおもみもとくたちゆく我が心かな
月夜には花とぞ見ける竹の葉に降りしく雪をたれかはらはん
などに先蹤を求めることができる。

その他、やはり『古今六帖』の在原行平の歌(二九六)、

恋しきに消えかへりつつ白雪のけさはおきぬ心地だにせず
も参考までに掲げておこう。

あさりする海士ともがなやわたつ海の

底の玉藻もかつき見るべく

※4…まを(平三) 5…たむる(心三) 6…きまむ(心三)

古六三
深六五
内六六

失踪した飛鳥井女君を海の底までも尋ね行きたいと願う狭衣。この独詠の背景には、『後撰集』七六の紀友則の歌(『友則集』三)

玉藻川の海士にはあらねどわたつみの底ひもしらず入る心か

な

『古今集』九六の貫之の作、

難波瀉おふる玉藻をかりそめの海士とぞ我れはなりぬべらなる

等が存在していようか。また、「底の玉藻」という表現は、左のことき歌にすでに見えている。

田子の浜洲崎のちかた(また「ちちい」)心して底の玉藻は我れに知らせよ

海士ならで底の玉藻もかつくなりいまはみるめのかたを尋ねよ

春風の吹きときがたの氷うすみ底の玉藻もいまや見ゆらん

涙川ながるあとはそれながら
しがらみとむる面影そなき

古六四
深六六・内六七

道成より返還された扇に遺る、飛鳥井女君の涙の跡。狭衣は感に堪えず自らも涙を新たにし、そこにこの歌を書きつけるが、その下の句には『古今集』八六の忠岑の作(『古今六帖』六六)。

瀬をせけば淵となりてもよどみけり別れをとむるしがらみそなき

が踏まえられている。さらに、土岐武治氏のいうように、この狭衣詠には、『源氏物語』手習巻の浮舟の歌、

身を投げし涙の川の早き瀬をしがらみかけてたれかとどめし
も影響を与えていると見るべきであろう(注)。なお、右浮舟詠は、

『拾遺集』八六(『古今六帖』六三)の、

涙川落つる水上卓ければせきぞかねつる袖のしがらみに依拠している。

けふやさはかけはなれぬる木綿襦
などそのかみに別れざりけん

古六九
深七一・内七二

齋院に卜定された源氏の宮がいよいよ潔齋所にはいる日が来た。

失意の狭衣は彼女を捉え痛恨の心中を歌に託すが、この一首が、『源氏物語』賢木巻の光源氏と朝顔の齋院の贈答、

かけまくはかしこけれどもそのかみの秋おもほゆる木綿襦かな

そのかみやいかがはありし木綿襦心にかけてしのぶらんゆゑを念頭において形成されていることは、土岐武治氏の指摘するとおりであろう(注)。なお付言すれば、「木綿襦」と「かけはなれ」との連繋は、『大齋院前御集』五・六の、

つみしかばねぞなかれにし木綿襦かけはなれたるこしのあふひは

木綿襦かけはなれたるあふひ草なにつみともおもほゆるかな

『和泉式部統集』一五の、

あふひ草つみだにいれず木綿襦かけはなれたるけふの袂は
等少なからず見られ、初句「けふやさは」の先例には、次のような歌がある。

けふやさは思ひたつらん旅衣身になれねどもあはれとぞ聞く

(『伊勢大輔集』二〇・『新勅撰集』五五)

けれ (丹後・「某年秋六条齋院歌合」六)

吉野川浅瀬白波たどりわび
わたらぬ中となりにしものを

古七〇
深七二・内七三

粉河寺へ向かう途中、吉野川を渡る舟の中で詠まれたこの狭衣の
独詠は、まず、『古今集』一七の友則の歌(『古今六帖』一五・『
友則集』七・『兼輔集』元)。

天の川浅瀬白波たどりつつわたりはてねばあけぞしにける
に確かに拠つていよう。そして、第四句「わたらぬ中」については、
『後撰集』六六(『深養父集』五)の、

り かはと見てわたらぬ中になるるはいはでもの思ふ涙なりけ

が原拠であると考えられる。さらに、下の句の表現は、『朝光集』
歯の、

いまさらにおぼつかなしやまたなさんへだてぬ中となりにし
ものを

に類似している。

うき舟のたよりに行かんわたつ海の
そこと教えよ跡の白波

※…たより(深か)

古七二
深七四
内七五

飛鳥井女君追慕の狭衣の独詠であり、卷二最後の歌である。結句
「跡の白波」は、同巻の散文部分においてすでに用いられていたが

(全書・三〇頁)、この語の出所は、沙弥満誓の著名な歌、

世の中をなににたとへん朝ぼらけ漕ぎ行く舟の跡の白波

(『拾遺集』三三七・『古今六帖』八・『和漢朗詠集』五九)
と考えてよいであろう。また、清水浜臣書人本は、『伊勢物語』七
〇段の、

舟 みるめかるかたやいづこそ棹さして我れに教えよ海士の釣り

という歌を挙げているが、全書はこれについて、「発想の類似にと
どまらう」とする(補注九〇・三〇頁)。

そのほか、

岩橋を夜々だにもわたらばや
絶え間やおかん葛城の神

古四三
深四五・内四六

は、『拾遺集』三〇二(『小大君集』三)の、

岩橋の夜のちぎりも絶えぬべしあくるわびしき葛城の神
を、

韓泊底の水屑とながれしを
瀬々の岩波尋ねてしがな

※…もつ(深か) 3…谷(深か) 4…いほ(深か)

古六二
深六四
内六五

は、『拾遺集』八七の源順の作、

涙川底の水屑となりはてて恋しき瀬々にながれこそすれ
を、それぞれ念頭に置いたものと思われる。

また、

思ひやる心ぞいとどまよひぬる
海山とだに知らぬ別れに

※……いとどまよひぬる(深か)・いとまよはる(内ほか)・いとあやぢん(深か)

古四八
深五〇
内五一

には、『後撰集』九〇の伊勢の歌、

影見ればいとど心ぞまどはるる近からぬけのうときななりけり

を、

そよさらに頼むにもあらぬ小笹さへ

末葉の雪の消えもはてぬよ

※……そよまた(深か) ……まよはら(古ほか) ……まよはぬた(深か)

古六一
深六三
内六四

には、『好忠集』五七の、

すばへする小笹が原のそよまきに人忘るべき我が心かは

を、

神代よりしめひきそめし榊葉を

我れよりほかにたれか折るべき

※……しめひき(深か)・しめひき(相深か) ……われちまに(内ほか)

古六六
深六八
内六九

には、『馬内侍集』四〇の、

おもほえず涙の川に濡れぎぬを我れよりほかにたれか着るべ

き

を、参考歌として掲げておくことにする。

注

- (一) 「狭衣物語」作中歌の背景(一)「(文献探究二二、昭六三・九)
- (二) この歌は『古今集』にも収載されているが(六九〇)、第三句「いさよひに」となっている。
- (三) 『大斎院前御集』は孤本であり、その本文には不審な箇所が少なくないようである。ここに挙げた一八〇番歌の第四句を、『私家集大成』・『経国歌大観』ともに「よそふるこゝろ」と起こしているが、「こゝろ」は「ころ」とも読め、歌意の上からはこのほうがよい。詳しくは原文について見られたい。
- (四) この贈答は、源基平(侍従宰相)と康資王母との間で交わされたもので、基平の任侍従が永承六年(一〇五五)、死没が康平七年(一〇六四)であるため、詠歌年時はこの間に絞られ(保坂都著『大中臣家の歌人群』(昭四七、武蔵野書院)参照)、『狭衣物語』の成立には先んじている。
- (五) 津本信博著『更級日記の研究』(昭五七、早稲田大学出版部)は、『更級日記』の歌が『狭衣物語』の作中歌に拠ったものであると判断しているようであるが(二七二頁)、両者に直接の影響関係があったとしても、その方向は逆に考えるべきであろう。
- (六) 『狭衣物語の研究』(昭五七、風間書房)・七二四頁。
- (七) 注五書・五〇八頁。